

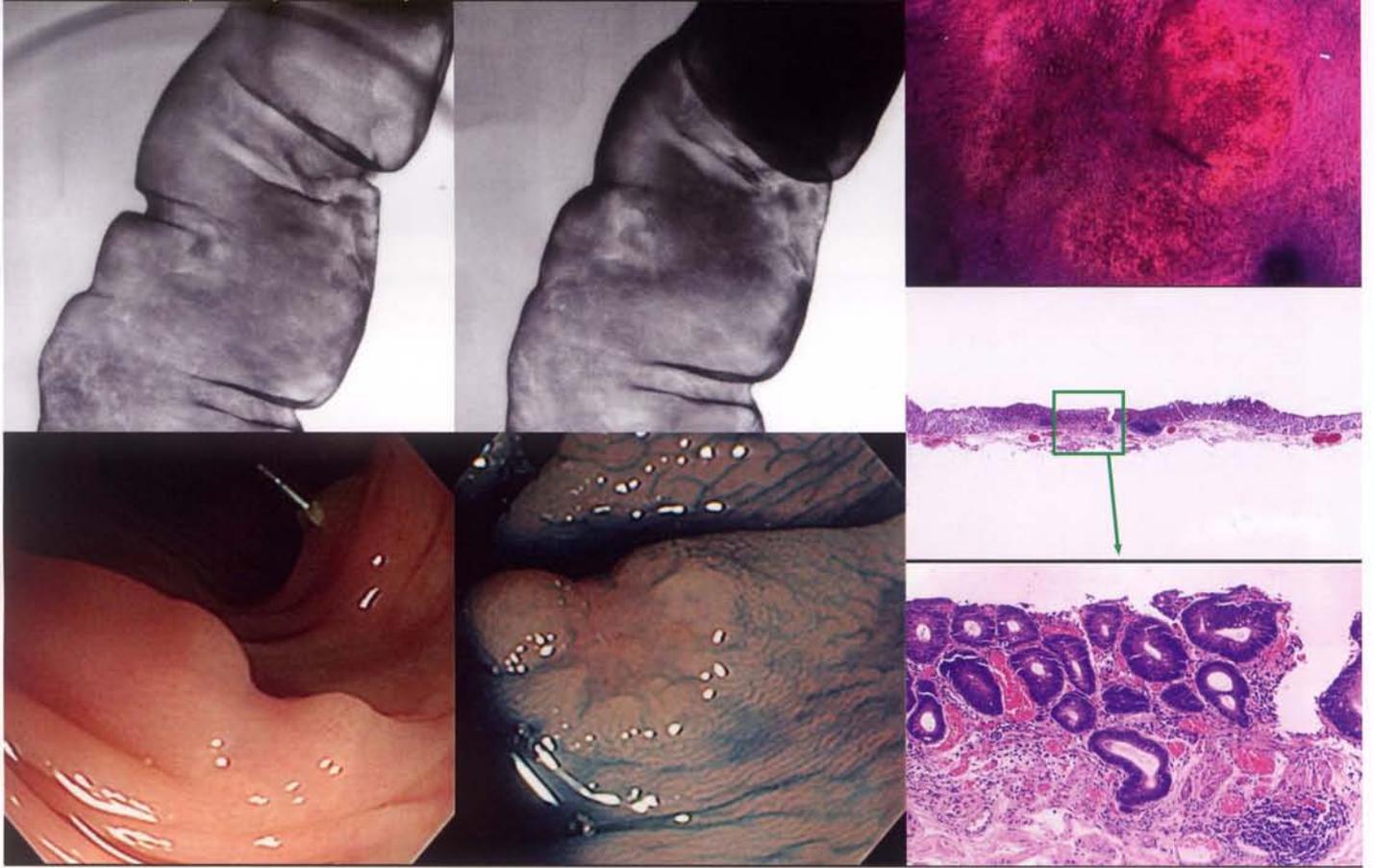
Kyokui Dayori

●発行日
平成22年 8月25日
●発行者
社団法人 旭川市医師会
旭川市金屋町1丁目1番50号

旭医だより

vol.123

D colon, IIc, 5mm, sm1



旭川で初の国際学会、 7th International Symposium on Tonsils and Mucosal Barriers of the Upper Airways (第7回 国際扁桃・粘膜免疫 シンポジウム)、を主催して

旭川医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室教授
原 洸 保 明

去る、平成22年7月7日(水)～9日(金)の3日間にわたり、旭川グランドホテルにて7th International Symposium on Tonsils and Mucosal Barriers of the Upper Airways(第7回 国際扁桃・粘膜免疫シンポジウム)を、私が会長を承り、旭川医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室が主催で行った。当教室では私が教授就任以来、2005年の第18回日本口腔・咽頭科学会をはじめ、2007年に第37回日本耳鼻咽喉科感染症研究会ならびに第31回日本医用エアロゾル研究会、2009年に第71回耳鼻咽喉科臨床学会と、これまでに3つの大きな全国学会を主催したが、国際学会の運営は初めてであり、また旭川医科大学の教室が主催となって大きな国際学会を旭川で開催するのは初めてなので、我々スタッフのみならず旭川グランドホテル、旭川にある学会イベント会社(イベントサービス)、名鉄観光旭川支店にとっても、まさに手探りの中での学会運営であった。

このシンポジウムは、耳鼻咽喉科のみならず、免疫学などの扁桃・アデノイドおよび上気道粘膜免疫を専門とする世界中の研究者が一同に集い、お互いに最先端の基礎的・臨床的研究成果について議論することを目的として、3～4年に一度開催されている。今回、私が会長として主催するシンポジウムの目的のひとつは、掌蹠膿疱症やIgA腎症などの扁桃病巣疾患を日本のみならず、世界中に広く啓蒙することが目的であったことから、この分野に興味のある腎臓内科医や皮膚科医にも演題発表をお願いした結果、156演題と過去の約2倍、最多演題数となった。参加人数も過去最多の250名を超え、海外からはアメリカ合衆国9名、イタリア5名、中国5名、韓国2名、ノルウェー、ブラジル、アイスランド各2名、オーストラリア、ベラルーシ、スイス、サウジアラビア各1名の計31名の参加をいただき、まさに本シンポジウムの目的に即した国際色豊かなシンポジウムとなった。

7月7日の初日には、私の開会挨拶に引き続い

て、和歌山医科大学耳鼻咽喉科の山中教授によるOpening lecture、さらにノルウェーのオスロ大学Per Brandtzaeg教授、アメリカのロズウェルパーク癌研究所免疫学部門Yasmin M. Thanavala教授などから上気道の粘膜免疫機構についてレクチャーがあった。

2日目の7月8日には、旭川グランドホテル3階を借り切って、2会場で口演発表、1会場ではポスター展示と討論が行われた。ポスター会場には72題のポスター演題が掲示され、討論が行われた。2つの口演会場の一方では粘膜免疫や上気道粘膜ワクチンをテーマに、もう一方では扁桃炎や上気道炎に対する薬物・手術治療をテーマにそれぞれシンポジウムが行われた。また、keynote lectureではニューヨーク州立大学バッファロー校名誉教授Pearay L. Ogra先生による上気道粘膜免疫研究の歴史と今後の展開に関する講演や、イタリアのシエナ大学医学部耳鼻咽喉科Desiderio Passali教授による小児の睡眠時無呼吸に関する講演など、各領域での国内外のエキスパートによるレクチャーがあった。また、Special lectureとして粘膜免疫研究の世界的権威である、東京大学医科学研究所感染・免疫部門、清野宏教授の講演があった。私もPresident lectureとして当教室で行ってきた扁桃病巣疾患における基礎的・臨床的研究成果を発表した。私が主催する本シンポジウムの目的のひとつは、先に述べたようにIgA腎症や掌蹠膿疱症に対する扁桃摘出術の有効性と扁桃病巣疾患の発症機序について、この旭川の地から本邦のみならず世界中に広く発信することである。講演後には海外からの参加者の多くから賛同と賞賛をいただき、本シンポジウムの目的のひとつをかなえられたと思う。

7月9日には2つの口演会場の一方ではIgA腎症や掌蹠膿疱症を、もう一方では上気道におけるウイルス感染やアレルギー炎症、中耳炎を、それぞれテーマに国内外のスペシャリストによるレクチャーがあった。IgA腎症や掌蹠膿疱症に関するシンポジウムでは耳鼻咽喉科だけではなく、腎臓内科、皮膚科、小児科のスペシャリストから講演していただいた。それぞれの診療科の垣根を超えた総合的なディスカッションがなされたものと自負している。また、ニューヨーク州立大学バッファロー校小児科教授で私の恩師であるHoward Faden先生からは上気道粘膜免疫と中耳炎について、アラバマ大学バーミングハム校微生物学David E. Briles教授には肺炎球菌と上気道粘膜免疫との関連について特別講演をいただいた。

国際学会ではSocial programも重要なイベントである。本学会では7月7日にWelcome party、7月8日にBanquet、7月9日にPresident Dinner、7月10日にExcursionとして美瑛・富良野ツアー、

さらに Accompany person's program として旭山動物園ツアーと "Discover Japan Tour" を企画した。Welcome Party は立食形式で行った。教室の森合重君のピアノ演奏を BGM に参加者たちは久しぶりの再会を夜遅くまで楽しんでた。Banquet では旭川グランドホテル 3 階全体を使って会場とし、料理は北海道の旬の食材を使ったフルコースディナーとした。参加者の大部分 230 名が出席した。海外からの参加者には是非とも日本の伝統的な文化に触れて頂きたいと考え、当科の女性は 7 名全員振り袖に着替え、オープニングでは三味線と琴の演奏を催した。続いて、来賓である吉田晃敏旭川医科大学学長、西川将人旭川市長、市川銀一郎日本耳鼻咽喉科学会前理事長よりご挨拶をいただいた後に、前回会長のイタリアのシエナ大学耳鼻咽喉科 Passali 教授に祝杯をしていただいた。その後、私と古くからの友人である次期会長のチューリッヒ大学 David Nadal 教授を紹介し、2013 年のチューリッヒでの開催についてご挨拶いただいた。また、海外からの参加者にも法被を着て頂き、日本の伝統的な儀式である鏡割を行った。この樽酒は学会のロゴマークが焼かれた特製の升で参加者全員に振る舞われた。さらに、サプライズゲストとしてアイヌ民族出身の有名なミュージシャンである OKI を招いて、伝統弦楽器であるトンコリなどによるアイヌ伝統音楽を堪能していただいた。この演奏には国外のみならず国内からの参加者も圧倒されたようで、終了後も拍手が鳴り止まなかった。多くの参加者が言葉の垣根を超えて親交を深め合い、その祝宴は深夜にまで及んだ。まさにこれは主催者の意図したものであり、非常に有意義な懇親会であった。

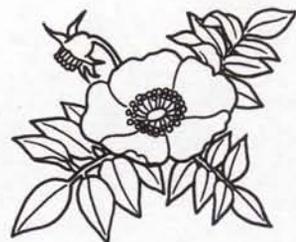
Scientific program が全て終了した 7 月 9 日の夜には President dinner を催した。旭川グランドホテル 14 階のレストラン・シャンドールを借り切って国内外から組織委員や友人を約 60 名招待し、北海道の sea food を中心としたフルコースディナーを賞味していただいた。私がアメリカ留学した際の恩師である Faden 教授に祝杯をいただき、当教室から留学医師を送っているラボのボス、アメリカのロズウェルパーク癌研究所免疫学部門 Thanavala 教授とチューリッヒ大学 Nadal 教授に table speech をいただいた。ソムリエの称号をもつ Nadal 先生からも絶賛を浴びたワインの酔いと共に遅くまで招待者全員が歓談し、親交を深めた。

国際学会では家族同伴も多く、同伴者のための企画 (accompany person's program) も用意した。そのひとつとして日本文化を体験するための "Discover Japan Tour" を企画した。これは同門会員である小林吉史先生 (ながやま一番通りクリニック院長) の純和風大邸宅に参加者を招待し、日本の伝統文化である琴、三味線の調べを直に堪能し、お

茶の作法を実際に体験する企画である。私の家内と海外のご夫人が 20 名ほど参加し、日本の文化を堪能していただき、満足度も高く、たくさんのお褒めの言葉をいただいた。小林先生奥様とそのお仲間には、この企画に大変なご協力をいただき、さらに前述した Banquet でも、すばらしい三味線と琴の演奏を披露していただき、心から感謝している。

学会終了の翌日、7 月 10 日には美瑛、上富良野への周遊旅行ツアーを企画した。国外を中心に約 60 名が参加し、バス 2 台をチャーターして北西の丘展望公園、新栄の丘展望公園、拓真館、後藤純男美術館を周遊した。特に拓真館での写真と後藤純男美術館での日本画には国外の参加者も感動したようで、しきりにその解説に耳を傾けていた。無事帰国された参加者たちからは、学会スタッフのホスピタリティに対する感謝の手紙が数多く届いた。

今回の学会は、当教室のみならず、旭川市、旭川グランドホテル、学会イベント会社 (イベントサービス) にとっても初めて主催した国際学会であったが、無事成功裡に終了することができた。海外からの参加者も大変満足し、当教室のみならず、旭川医大、国際都市としての旭川を大きくアピールできたと思う。このような大きなイベントを成功させたことは、我々教室員のみならず、同門会、グランドホテルのスタッフ、学会イベント会社 (イベントサービス) にとっても大きな自信になり、誇りに思うべきことである。なお、当教室は私が会長となって、来年、平成 23 年 4 月 21~22 日に第 23 回日本喉頭科学会総会・学術講演会を主催する。当教室は耳鼻咽喉科の分野では最多の学会を催す教室のひとつとして認識されるようになったが、今後もより一層、耳鼻咽喉科学のみならず旭川医大、旭川の医療に貢献していくつもりである。最後に、多大なご支援をいただいた同門会の方々、特に旭川で開業している同門会の先生に紙面を借りて厚く御礼申し上げます。





Banquet での乾杯



学会風景



Banquet での鏡割



吉田学長、原淵会長とスタッフ



スタッフ全員の集合写真